

■プレゼンテーション 2■

拡張する哲学対話としての当事者研究

キーワード：哲学対話、当事者研究、重度重複障害者とのコミュニケーション

堀田利恵子（鎌倉哲学カフェ）

鎌倉で哲学カフェを開催するようになって4年が経ちましたが、哲学徒だったわけでもない私が『哲学』に関わるようになったそもそものきっかけは、重い障害を持って産まれてきた息子の母親になった事からでした。

「おそらく左半身に重大な障害が残る」と医師に宣告されたものの、それがどの程度の障害なのか、動けるようになるかどうかは、「分からない」という医師の答えに、心底驚き、その中でぼんやりと浮かんできたのが「”動かない身体”って、一体何だろう？」という問いでした。それでは、動く身体って一体何だろう？と身体表現を求めて、バレエ等を見に通ったりしていたのですが、そのうち「身体論」というものがある事を知りました。

やがて息子と、Facilitated Communication という方法で意思疎通ができるようになったのですが、介助者がクライアント（当事者）の手を支えて、文字盤の上に表示される言葉を読み取っていくそのやり方は、「まるでデュエットのダンスだ」と強い衝撃を覚えました。

当時、国立特別支援教育総合研究所で教育相談を受けていたのですが、担当の笹本 健先生のおはからいで、立教大学の河野哲也先生と東京大学の石原孝二先生を紹介していただき、その後駒場東大キャンパスで、「コミュニケーションとリハビリテーションの現象学研究会（コミリハ研）」が立ち上がると、興味を引かれて通うようになりました。

その時初めて「哲学ってこれまで全く縁がなかったけど、凄く面白いかも」と思いました。また、コミリハ研でべてるの家の当事者研究を知り、これはぜひ息子と一緒に所属している「学習会サロン（障害児・者の当事者活動グループ）」でやってみたいと思っただけのもの、なかなかきっかけを掴めずにいたのですが、ひょんなことから鎌倉で「哲学カフェ」をスタートさせることになりました。

学習会サロンでも哲学カフェを何度か開催した後、今年になってようやくその仲間たちと「nicotama 当事者研究会」を発足させることになったのですが、ここまで自分自身で哲学対話に取り組んでいなければ、おそらく当事者研究には行き着けなかったのだと思います。

当事者研究を実践してみて、改めてその可能性の高さを感じています。今後も社会の中での対話の場の一つの在り方として、哲学カフェと平行して続けていこうと思います。

（ほりた・りえこ）鎌倉哲学カフェ主宰者。

【鎌倉哲学カフェ】2012年より神奈川県鎌倉市で開催。「ゆっくりと考え、聞く。そして変わる」をモットーに、様々なテーマで哲学対話を行う。都内での出張開催、他の哲学カフェへの運営協力も多数行う。<https://www.facebook.com/kamakuraphilosophycafe/>